太上玄一眞人説勸誡法輪妙經（法輪妙経Ｂ　ＨＹ三四八）訳注ノート（一）

『法輪妙經』読書会（林佳恵・浅野愛）

一　はじめに

本稿は、『アジアの思想と文化』第三一号に掲載した、『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙經』（ＨＹ三四六。以下、『法輪妙経』Ａ）訳注ノートに続き、『太上玄一眞人説勸誡法輪妙經』（以下、『法輪妙經』Ｂ）に漢文の訓読・現代語訳・語釈・注釈を加えた訳注ノートである。訳注作業に関しては、『アジアの文化と思想』第三一号の訳注ノートの前言に準ずる。

なお、当初は七丁ある全文訳注の一挙公開を予定していたが、読書会メンバー二名の諸事情（特に時間的制約）により、『法輪妙經』Ｂは、大まかに以下のように分けて訳注作業を進め、順次公開する形をとることとした。全文の訳注を終えた段階で訂正等が必要な個所が生じた場合は、『法輪妙經』Ｂの訳注稿の最終部分の公開時に、それらをあわせて示すこととする。

二　テキストの分割

『法輪妙經』B全七丁は、次のような内容構成になっている。併せて、訳注作業の上で、便宜上七つに分けたテキストについても示す。

1．上士・中士・下士の各修行内容及び登仙に至る輪転の回数などについての記述：
一丁～三丁裏　…テキスト1（一丁～二丁裏）
テキスト2（二丁裏～三丁裏）

2．「無上八門開度法輪偈頌」等三篇を説く前提となる修行・開度についての記述：
三丁裏～四丁裏　…テキスト3

3．「無上八門開度法輪偈頌」：四丁裏～五丁表　…テキスト4

4．「轉輪滅度行業偈頌」：五丁表～五丁裏　…テキスト5

5．「轉輪命根未盡偈頌」：五丁裏～六丁裏　…テキスト6

6．太上玄一眞人に依る偈頌の功験の解説と軽伝・漏慢の禁止
六丁裏～七丁表　…テキスト7

今回は、テキスト1の部分の訳注ノートを『太上玄一眞人説勸誡法輪妙經』訳注ノート（一）として公開する。

三　原文・訓読・訳注

テキスト1―1（一丁表一～九）

道言。「夫輪轉、福慶不滅、生而好學、宗奉師寶、與道結緣、世世不絶、皆由先身積行所致。如此法輪、上士（注1）勤尚廣開法門、先人後身、救度國王、損口拯之、裸形衣寒、仁及鳥獸、惠逮有生。恭師奉法、恒如對神、長齋苦思、精研洞玄（注2）、吐納炁液（注3）、心灰意勤、割棄色累。萬想都泯、情和炁柔、人神並歡（注4）。如此之行、一滅一生（注5）、志不退轉、尅成上仙、三師備足、身登太極、位加仙卿（注6）。

テキスト1―1（一丁表一～九）**訓読**

道言ふ。「夫れ輪轉するも、福慶滅せず、生れて學ぶを好み、師寶を宗び奉り、道と縁を結び、世世絶えざるは、皆な先身の積行の致す所に由るなり。此くの如き法輪、上士は勤め尚び廣く法門を開き、人を先に身を後にし、國王を救度し、口を損ひ之を拯け、裸形に衣寒し、仁は鳥獸に及び、惠みは有生に逮ぶ。師に恭しくし法を奉ること、恒に神に對するが如く、長齋苦思し、洞玄を精研し、炁液を吐納し、心灰(めつ)し意勤め、色累を割棄す。萬想都て泯(ほろ)び、情和み炁柔らげば、人神並びに歡ぶ。此くの如きの行、

一滅一生し、志して退轉せざれば、尅く上仙を成し、三師備足せば、身は太極に登り、位は仙卿に加へらる。

テキスト1―1（一丁表一～九）**現代語訳**

道はこのように言われた。「そもそも生と死を繰り返しても、福慶は滅せず、生まれて（道の教えを）学ぶことを好み、宝である師を尊んで奉り、道と縁を結び、（そのことが）生まれ変わるたびに絶えることがないのは、皆な前世の身が修行を積んだことによって至ったことだからである。このような法輪（さえぎられることなく続く教え）を、上士は精を出して勤しみあがめ、広く教えの門を開き、他者を優先し自分のことは後にし、國王を救って悟りの世界へ渡し、自分の食べるものを割いて他者をたすけ、裸でいる者には寒い時には衣を着せてやり、その仁の心は鳥獣にまで及び、恩恵は命あるものすべてにおよぶ。師に慎み深くへりくだり教えを奉じることは、恒に神に対しているようであり、長齋してよく瞑想し、奥深い悟りの境地をしっかりと研修し、陰陽の気を呼吸する身体修養を行い、心（に浮かぶ雑念）を滅し心向きは精を出して勤しみ、世俗のしがらみや欲望を断絶して棄てる。あらゆる己の欲望は滅び、感情は調和し炁が柔らぐと、人も神もみな歡ぶ。このような修行をして、一度死んで生まれ変わって、（道を得ることを）志して退くことがなければ、首尾よく上仙と成り、三人の師が揃えば、その身は（天界の）太極に登り、その位は仙卿に加えられるのである。

テキスト1―1（一丁表一～九）**語釈・注釈**

（1）上士・中士・下士：本来は周代の士の階級。但し、『老子』第四十一章では、「上士聞道、勤而行之。中士聞道、若存若亡。下士聞道、大笑之（上士は道を聞かば、勤めて之を行なふ。中士は道を聞かば、存するが若く亡ずるが若し。下士道を聞かば、大いに之を笑ふ）。」（『老子』蜂谷邦夫訳注、岩波文庫、二〇〇八年、一九六～一九八頁参照）とあり、ここでの上士・中士・下士は、人物のランクを示すものとして使われている。（なお『太極眞人敷靈寳齋戒威儀諸經要訣』ＨＹ五三二、十二丁には、「上士聞道、勤而行之。中士聞道、若存若亡。下士聞道、大笑道矣」と見える。）道典中の上士・中士・下士の用法は、『老子』の用例に倣うものであり、『抱朴子内篇』巻四「金丹」には、「其經（太清觀天經）曰、上士得道昇爲天官、中士得道棲集崑崙、下士得道長生（其の經に曰く、上士は得道して昇りて天官と爲り、中士は得道して崑崙に棲集し、下士は得道して長生す）」（『抱朴子内篇校釋』増訂本、王明撰、中華書局、二〇〇二年、七六頁）とあり、人物のランク別に道を得て到達する境地について述べている。これに類似する記述としては、『道教義樞』（ＨＹ一一二一、孟安排集）巻一の位業義第四に、前掲の『抱朴子内篇』からの引用として「抱朴子引仙經云、上士擧形昇虛、謂之天仙、中士遊於名山、謂之地仙、下士先死後脱、謂之尸解（抱朴子仙經を引きて云ふ、上士は形を擧げ虛に昇る、之を天仙と謂ふ、中士は名山に遊ぶ、之を地仙と謂ふ、下士は先に死して後に脱す、之を尸解と謂

ふ）」云々という文に続き、「天仙、地仙、尸解」について更に、「自然經訣云、上仙白日昇天、中仙棲於崑崙蓬萊等名山空中結宮、下仙常棲諸名山洞室（自然經訣に云ふ、上仙は白日昇天す、中仙は崑崙蓬萊等の名山に棲み空中に宮を結ぶ、下仙は常に諸名山の洞室に棲む）云々、と『自然經訣』を引用している。この二つの引用を見ると、『道教義樞』中の『抱朴子内篇』の引用文では「天仙、地仙、尸解」としているものが、『自然經訣』の引用文では、「上仙、中仙、下仙」となっており、この二つを対応させると、天仙＝上仙、地仙＝中仙、尸解＝下仙というランク付けがされている、と見ることができる。（なお、『道教義樞』中の『抱朴子内篇』の引用文は、現行本『抱朴子内篇』の該当箇所より記述が詳しい。）また、この『自然經訣』に該当すると考えられている、現存する敦煌写本断片『太上霊寶威儀洞玄眞一自然經訣』（ペリオ二三五六、ペリオ二四〇三、ペリオ二四五七、『中華道蔵』第三巻所収）には、引用部分に該当する箇所は見えない。この経典の敦煌写本断片は、経典の前の部分が欠けており、或いはその欠けた部分にこの記述があった可能性も考えられる。）『法輪妙経』Ｂでは、『抱朴子内篇』よりさらに詳細に、ランク別の修行法が記されているが、注目すべき点は、上士には「一滅一生」、中士には「三滅三生」、下士には「九滅九生」として、それぞれの境地に達するために必要な転生の回数が示されていることである。上士・中士・下士に分けて、修行の到達点を示すという例は、古霊宝経典では、他に例えば『太上洞玄靈寶智慧本願大戒上品經』（ＨＹ三四四）に「太極眞人曰、道徳五千文、經之大也。是道也。故通乎天地人、萬物從之終始也。上士受誦爲太上仙王。中士受誦爲飛仙。

下士受誦生轉輪聖王家、不經地獄、常生福國、命過之時、天帝雲車迎其魂神、安處福堂也（太極眞人曰く、道徳五千文は、經の大なるなり。是れ道なり。故に天地人に通じ、萬物は之に從ひて終始するなり。上士は受誦して太上仙王と爲る。中士は受誦して飛仙と爲る。下士は受誦して轉輪聖王の家に生まれ、地獄を經ずして、常に福國に生まれ、命過ぐるの時、天帝は雲車もて其の魂神を迎へ、福堂に安んじ處くなり）」（十一丁）とあるが、修行者のランク毎に、決められた回数の転生を繰り返し、その中で修行を続けて、最終的にランク毎に設定された到達点に達する、という考え方は見えない。これは、『法輪妙経』に見える特徴的なものと考えられる。また、『法輪妙経』Ｂでは、「一滅一生・三滅三生・九滅九生」という輪廻転生思想を示す表現のほか、「不退轉」という語も見え、『抱朴子内篇』の記述と比較すると、仏教的な色彩が窺える。

（２）洞玄：『太上洞玄靈寶滅度五錬生尸』（ＨＹ三六九）に「天尊今開化大法、教化童子諸天大神、而披龍漢之玄奥、開演洞玄之秘文（天尊今大法を開化し、童子諸天大神を教化し、而して龍漢の玄奥を披き、洞玄の秘文を開演す）」（十八丁～十九丁）、『太上無極大道自然眞一五稱符上經』（ＨＹ三六九）巻上に「洞玄者與空洞本眞也（洞玄とは空洞と與に本眞なり）」（三丁）とあるので、ここでは、「精研洞玄」を「奥深い悟りの境地をしっかりと研修する」意に解釈した。なお、『上清太極隠注玉經寶訣』（ＨＹ四二五）に、「靈寶經或曰洞玄、或云太上昇玄經、皆高仙之上品、虚無之至眞、大道之幽

寶也（靈寶經或いは洞玄と曰ひ、或いは太上昇玄經と云ふ、皆な高仙の上品、虚無の至眞にして、大道の幽寶なり）」（十一丁～十二丁）とあり、霊宝経を指して「洞玄」としている用例もあるが、ここでは、文脈から見て霊宝経も含めての意味で、「奥深い悟りの境地」と訳した。

（3）吐納炁液：吐納は、体内の古い気（故気）を吐き出し、新しい気を体内に取り込み、身体の清純化を図る呼吸法の一つ。但し、ここでは「炁液」を吐納するとある。この「炁液」について、時代は下るが、『西山群仙會眞記』（HY二四六、五代、施肩吾撰）の巻三に「『太上玄鏡』曰、純陽上昇者謂之炁、純陰下降者謂之液。炁液相交注於骨絡之間者、謂之髓。炁液相交出於膀胱之外者、謂之精（『太上玄鏡』に曰く、純陽上昇するは之を炁と謂ひ、純陰下降するは之を液と謂ふ。炁液相ひ交はり骨絡の間に注ぐは、之を髓と謂ふ。炁液相ひ交はり膀胱の外に出づるは、之を精と謂ふ）。」（五丁）とあるのが、参考になろう。ここから、炁を純陽の気、液を純陰の気と考えると、「吐納炁液」とは、純陽と純陰の気を呼吸する修養法と見ることができるが、純陰純陽の気の呼吸法と解釈したとして、その具体的な方法はこれだけではよくわからない。吐納法は身体修養の一つであり、身体修養、即ち養形については、『荘子』外篇「刻意篇第十五」に、「吹呴呼吸、吐故納新、熊經鳥申、爲壽而已矣。此道引之士、養形之人、彭祖壽考者之所好也（吹呴呼吸し、故を吐し新を納れ、熊經鳥申して、壽を爲すのみなり。此れ道引の士、養形の人、彭祖の壽考なる者の好む所なり）。」とあり、吐納の実践者を養形の人、と

している。その後に続く「若夫不刻意而高、無仁義而脩、無功名而治、無江海而閒、不道引而壽、無不忘也、無不有也、澹然無極、而衆美從之、此天地之道、聖人之德也（若し夫れ意を刻せずして高く、仁義無くして脩まり、功名無くして治まり、江海無くして閒、道引せずして壽なれば、忘れざること無く、有らざること無く、澹然として極り無く、而して衆美之に從ふ、此れ天地の道、聖人の德なり）。」とあり、導引のような身体修養をしないでも長寿となることの方がすぐれている、としている。（『荘子』については、金谷治訳注『荘子』（岩波文庫、一九九六年第四十刷、第二冊、二一八～二二八頁）、及び池田知久全訳注『荘子（上）』（講談社学術文庫、二〇一四年、九三四～九四三頁）を参照。）これは、精神の修養、即ち養神を、養形よりランクの高い修養法とするものであるが、もし、「吐納炁液」が養形の修養法だとすると、それが、『法輪妙經』Ｂでは、上士の修養法に含まれ、それとは逆に、下士の修行法に養形より上位の修養法である「養神」（テキスト１―３の「服御養神」）が含まれていることは、どのように解釈すべきか、という疑問が生じる。先に考察したように、「炁液」が純陰純陽の気の呼吸法であるとすると、ここでの「吐納炁液」は、単なる身体修養としての呼吸法ではなく、何らかの精神的な修養法、もしくはそのような実践を含む呼吸法である可能性が考えられる。「養神」、「養形」については、アンリ・マスペロが、身体を不死なるものに変える二つの実践法として、物質的な面を「養形」、精神的なものを「養神」としているが、この「養神」には内丹的な呼吸法が深くかかわるとしている。この指摘から見て、『法輪妙經』Ｂの「吐納炁液」は、内丹的呼吸法である可能性が

高いと考えることができる。（アンリ・マスペロ著、川勝義雄訳『道教』、東洋文庫三二九、平凡社、一九八八年初版第十刷、Ⅰ中国六朝時代の宗教信仰における道教、一、道士と不死の探求、一七～一九頁参照。）以上のように考察した結果、具体的な内容が現時点では不明のため、ここでは「陰陽の気を呼吸する」と訳した。なお、「養神」、「養形」について、石田秀実氏が、前掲の『荘子』外篇「刻意篇」は、「養形」による「養生」を批判し、「養神」のみを説くかに見えるが、ここでは「形態があってこそ永らえうる生を前提として」養神を説いている、と指摘している。（『道教辞典』、平川出版社、一九九六年初版第二刷、五八一頁「養生」の項参照。）

（4）人神並歡：この「神」が、具体的にはどのような神であるのかは、この記述だけではわからないが、ここでは、修行により心身の状態が善くなることが、その人にとっても、神にとっても歓ぶべきことであると述べている。道教では、身体にもそれぞれの部位に身中神が宿る、という思想があり、人と同じくその人の心身の良好となることを歓ぶ神は、おそらく、この身中神であると推察される。身中神については、例えば古霊宝経の一つ、『洞玄靈寶二十四生圖經』（ＨＹ一三九六）の十一丁に、肺には「中眞二景肺神。名素靈生。字道平。色白（中眞の二景は肺神。名は素靈生。字は道平。色は白）」、十二丁に、心には「中眞三景心神。名煥陽昌。字道明。色赤（中眞の三景は心神。名は煥陽昌。字は道明。色は赤）」、肝には「中眞四景肝神。名開君童。字道清。色青（中眞の四景は肝神。名は開君童。

字は道清。色は青）」などと、人の身中に鎮在する神々に関する記述がある。

（5）一滅一生、三滅三生、九滅九生：輪廻転生の回数を示したもの。一滅一生は、一度、三滅三生は三度、九滅九生は九度、死んで生まれ変わること。（注1）参照。

（6）三師備足、身登太極、位加仙卿：『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙経』（『法輪妙経』A）四丁には、葛玄を太極に昇らせ、仙公とするために、三眞人が降臨することが記されている。更に『法輪妙経』Bでは、上士は三師が備われば太極に昇って仙卿の位を得る、とあることから、『法輪妙経』では、葛玄を上士と考えていることがわかる。

テキスト1―2（一表一〇～一裏六）

中士（注1）篤好、志慕在玄、開度一切、度厄解患、施功布德、建立福田（注7）、君親忠考、柔智懷仁、願樂三寶、晨夕修研、虛心有道。口味靈篇（注8）、燒香散華、洞入道門。餐不念飽、衣不慊寒、苦不爲倦、樂不爲懽、勞不怠懈、困而殊勤、衆行並備、三滅三生（注5）、意志審固、尅得飛行、上遊太清、補九宮眞人（注9）。

テキスト1―2（一表一〇～一裏六）**訓読**

中士は篤く好みて、志慕は玄に在り、一切を開度し、厄を度し患ひを解き、功を施し徳を布き、福田を建立し、君親に忠考、智を柔らげ仁を懐き、三寶を樂しむを願ひ、晨夕に修研し、心を虚くして道有り。口に靈篇を味はひ、燒香し散華し、道門に洞入す。餐して飽くを念じず、衣て寒を慊せず、苦しみて倦を爲さず、楽しみて懽を爲さず、勞めて怠懈せず、困して殊らに勤め、衆たの行並な備さにし、三滅三生して、意志固きを審らかにし、尅く飛行するを得て、太清に上遊し、九宮眞人に補せらる。

テキスト1―2（一表一〇～一裏六）**現代語訳**

中士は熱心に（道の教えを学ぶことを）好み、（得道を）志して慕う思いは奥深い悟りへ向けられ、一切のものを導いて悟りの世界に渡し、厄災から抜け出させて患いを解消し、功徳を施し広め、善行を行った結果として福徳を生じさせ、主君には忠、親には考の心をもって仕え、智恵を穏やかなものにし仁の心を懐いて、三寶の供養を心から喜んで行うことを願い、朝夕修行して、心を虚しくすればそこに道が有るようになる。誦経して（天書である）霊妙な経典を味わい、燒香し散華し、道の教えの門に深く入る。食事では満腹になることを思わず、衣服では寒さに耐え、苦しい修行をしても倦むことなく、楽しんで憂えることはなく、働いて怠けず、疲れても殊らに励み勤しみ、たくさんの修行をすべて一通り行って、死と転生を三回繰り返して、（道を得ようとする）意志は固いことをあきらかにすれば、首尾

よく空中を飛行することができるようになり、太清の天に昇ってそこで遊び、九宮眞人に任命されるのである。

テキスト1―2（一丁表一〇～一丁裏六）語釈・注釈

（7）福田：仏教の用語で、「福徳を生じる田」の意味。但し、この「田」は譬えであり、仏法僧の三宝や父母などの供養や尊敬をする対象、或いは貧者のような施しの対象を指すと共に、供養し、尊敬し、布施をすることで福徳が生じること自体をも指す。道教は、この「福田」については、仏教側とほぼ同じ用法で用いている。ここでは、「建立福田」とあるので、この「福田」は供養や布施などの善行により生じる良い報いの意味で解釈する。『法輪妙經』が成立したと推定される劉宋期（※）に訳出された経典『雑阿含經』（大正新修大蔵経第二巻、№九九、三〇四頁上段）に、「如是沙門・婆羅門遠離五支、成就五支、建立福田。施此田者、得大福利、得大果報（是くの如く沙門・婆羅門は五支を遠離し、五支を成就し、福田を建立す。此の田に施せば、大福利を得、大果報を得ん）」（訳：沙門や婆羅門はこのように、五つの煩悩（五蓋）を遠く離れ、五つの功徳（五分法身）を成就して、福徳を生じる田を建立する。この（福）田（即ち沙門や婆羅門）に施すならば、大きな福利を得、大きな果報を得るであろう）とあり、「建立福田」という同じ表現が見える。なお、『道教義樞』（ＨＹ一一二一）巻九の「福田義第三十」に、「福田者、明因果之源、辨資酬之理、猶慈勝也。善芽從之以生、譬彼良田。福實因而

遂長、此其致也（福田とは、因果の源を明し、資酬の理を辨じ、猶ほ慈しみ勝るがごときなり。善芽は之に從りて以って生ずれば、彼の良田に譬ふ。福實は因りて遂に長ず、此れ其の致すなり。」（一丁）とあり、善行の報いが生ずることを、（良い作物が収穫できる）良田に譬えたものと解説している。

（※）『法輪妙經』の成立年代については、林拙論「古靈寶經に於ける『法輪罪福』の位置付け―陸修靜による靈寶經典分類の再考―」（『東洋の思想と宗教』第四十号、二〇二三年）参照。また、『雑阿含経』の訳出時期については、ＷＥＢ公開の榎本文雄氏の博士論文（平成十二年、京都大学）『『雑阿含経』の文献学的研究』論文概要を参照したが、そこで氏は、従来、唐代の『古今訳經圖記』に基づき、四三五～四四三年の間の訳出とされてきた『雑阿含経』は、六世紀前半の『出三蔵記集』及びそこに収められた『勝鬘經序』の記事から、四三五～四三六年の間に、求那跋陀羅が暗誦したものを寶雲が訳出したことが判明した、と述べている。

（８）靈篇：『雲笈七籤』（ＨＹ一〇二六、宋、張君房）巻四「道教經法傳受部」の「上清源統經目註序」に、「道君以中皇元年九月一日、於玉天瓊房金闕上宮命東華青宮、尋俯仰之格、揀校古文、選定靈篇、集爲寶經（道君は中皇元年九月一日を以て、玉天瓊房金闕上宮に於いて東華青宮に命じ、俯仰の格を尋ね、古文を揀校し、靈篇を選定し、集めて寶經を爲らしむ）」（李永晟点校『雲笈七籤』第一冊、中華書局、二〇〇三年、四八頁）とあり、これは『高上太霄琅書瓊文帝章經』（ＨＹ五五）十二丁にほ

ぼ同文がある。ここでの「靈篇」とは、経典を編纂する際の材料となるものであると考えられる。この「靈篇」については、『洞眞上清開天三圖七星移度經』巻上（ＨＹ一三〇六）に、「取札秘於雲錦之囊、常焼香左右、不得輕露。此上眞之至號、玉帝之靈篇也（札を取り雲錦の嚢に秘し、常に左右に焼香し、輕露するを得ず。此れ上眞の至號、玉帝の靈篇なり）。」（五丁）とある。その前に、三枚の天上界の玉臺の仙官の名が記された、長さ一尺六寸の玉札についての説明があり、この玉札を「玉帝の靈篇」と述べていることから、ここでの「靈篇」は一種の札を指すと考えられる。また、『上清元始變化寳眞上經九靈太妙龜山玄籙』巻上（ＨＹ一三八二）には、「九天眞王以上虚元年命玄都上眞、鑄金爲簡、衆聖明義・高上口訣選集靈篇、玉帝注筆、刻簡成章、以俯仰之格（九天眞王は上虚元年を以て玄都上眞に命じ、金を鑄て簡を爲り、衆聖の明義・高上の口訣もて靈篇を選集し、玉帝注筆し、簡を刻み章を成し、以て俯仰の格とす）」云々（一丁）とあり、衆聖や高上の名義や口訣を撰集したものを「靈篇」としている。以上のような用例から、「靈篇」が天上界の文であることは共通しているので、『法輪妙經』Ｂでは、「靈篇」を「（天書である）霊妙な経典」と訳した。

（9）九宮眞人：『眞誥』（ＨＹ一〇一〇）巻五「甄命授第一」に「仙道之妙、皆有方也。能盡此道、便爲九宮眞人（仙道の妙、皆な方有るなり。能く此の道を盡くさば、便ち九宮眞人と爲る）」（四丁裏～五丁表）云々とあり、仙道の妙には皆それぞれ修行法があり、それにより道を得れば九宮眞人になれ

ると説いている。同じく、『眞誥』巻五は「崑崙上有九府、是爲九宮。太極爲太宮也。諸仙人俱是九宮之官僚耳。至於眞人、乃九宮之公卿大夫（崑崙上に九府有り、是れ九宮たり。太極は太宮たり。諸仙人は俱に是れ九宮の官僚なるのみ。眞人に至れば、乃ち九宮の公卿大夫なり）」（十五丁）とあり、九宮眞人とは崑崙にいる眞人のようである。これは、『抱朴子内篇』巻四「金丹」に中士は得道して崑崙に棲む、また、『道教義樞』に引く『自然經訣』に中仙は崑崙蓬萊等の名山に棲む、とあることと一致する。（注1）参照。（なお、九宮眞人には、身中神として考えられているものもある。『登眞隠訣』（HY四二一）巻上に、頭部の九宮に在る身中神についての言及がある（『登眞隠訣輯校』陶功景撰、王家葵輯校、中華書局、二〇一一年、九～一二頁）が、『雲笈七籤』巻十五「祕要訣法・三一九宮法」では、頭部の九宮に出入りする身中神について、これを「九宮眞人」と呼んでいる（中華書局、『雲笈七籤』第三巻、二〇〇三年、一一〇七頁）。また、『太上洞玄靈寶赤書玉訣妙経』巻下の三十一丁には、身中神として「九宮眞人兵馬」が見える。）

テキスト1―3（一丁裏九～二丁表五）

下士（注1）修身斷情忍色、服御養神（注10）、遠棄榮麗、棲憩幽林、愛山樂水（注11）、耽翫静眞、淡泊守固、絶穀休粮（注12）、長齋念道、過中不味、端坐則與師寳相對、出入則與鳥獸爲羣。孤旅巖穴、獨景空山、思不慕歸、悲不悼形、契闊林澗、切栢擬餐、面有餓容、心如懐丹、艱苦備嬰、恒有和顔。見

試不恐、心靜神安。如此之行、上感虚皇（注13）、九滅九生（注5）、志願不退、執固殊堅、尅能變化、乗空飛行、遊宴五嶽（注14）、逍遥太無（注15）、從此而進位至髙仙。

テキスト1―3（一丁裏九～二丁表五）**訓読**

下士は身を修め情を斷じ色を忍び、服御して神を養ひ、榮麗を遠く棄て、幽林に棲み憩ひ、山を愛し水を樂しみ、静眞を耽翫し、淡泊守固し、穀を絶ち粮を休め、長齋して道を念じ、中を過ぎては味ははず、端坐せば則ち師寶と相ひ對し、出入せば則ち鳥獸と羣を爲す。巖穴を孤旅し、獨り空山を景し、思ふも歸るを慕はず、悲しむも形を悼（いた）まず、林澗に契闊（けいかつ）し、切栢して餐を擬（はか）り、面（おもて）に餓容有るも、心は丹を懷くが如く、艱苦備さに嬰わるも、恒に和顔有り。試みに見（あ）ひて恐れず、心は靜けく神は安らかなり。此くの如きの行、上（かみ）虚皇に感じ、九滅九生して、志して退かざるを願ひ、執固すること殊らに堅ければ、尅く能く變化し、空に乗じて飛行し、五嶽に遊宴し、太無に逍遥し、此れに從りて位を進め髙仙に至る。

テキスト1―3（一丁裏九～二丁表五）**現代語訳**

下士は身をつつしんで個人的な感情を絶ち、色欲を抑制し、（仙薬を）服用して精神の修養をし、世俗の栄華を遠くに捨て去り、静かでひっそりとした林に棲んでくつろぎ、山水を愛でて樂しみ、しんと澄み渡った真理を深く熱心に研究し、気持ちがあっさりとして欲のない状態を固く守り、穀物を絶ち主食

となる食べ物を摂ることをやめ、長齋して道を念じ、中午を過ぎてからは食事をせず、姿勢を正しくしてきちんと座ると宝である師と相対し、（静かな林の中を）往来すれば、やがて周囲に鳥獣が集まるようになる。一人で洞窟に暮らし、独り人気のない静かな山を眺め、心に思うにも（世俗の人の間に）帰りたいと慕うことはなく、悲しむにも変化していく物事の状態を悼むことはなく、林や谷間に人から離れて苦労して暮らし、食事をどうしようかと差し迫った状態にあって、顔に飢えた容貌が見えても、心は不老不死の丹薬を懐いているかのようであり、苦しく辛いことがことごとくまつわりついても、恒に穏やかな顔をしている。試練にあっても恐れることはなく、心は静まり精神は安らかである。このような行いは、上の方では虚皇に感応し、死と転生を九回繰り返して、（道を得ることを）志して退かないことを願い、そのことを固く守ることが殊ら堅固であれば、首尾よく（身体を）変化させることができるようになり、空中を飛行して、五嶽に宴を張って遊び、太無の境地を逍遥し、このことによって位を進めて高仙に至ることができるのである。

テキスト1―3（一丁裏九～二丁表五）**語釈・注釈**

（10）服御養神：「服御」は、辞書的には「用いる」の意味があるが、「服」一字には、「薬を飲んで体内に取り入れる」という意味がある。下士の修行法としては、物理的な方法、即ち服薬という方法が考えられていたことを示すものであると解釈できるので、ここでは「（仙薬を）用いて」と訳した。

「養神」については、（注３）を参照のこと。

（11）愛山樂水：『論語』巻三「雍也第六」に、「知者樂水、仁者樂山（知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ）」とある。この一節を踏まえて、下士の在り方として、山のようにゆったりとし、水のように流動的であるべきことを表現しているとも解釈できるが、本文ではその前に「棲憩幽林」とあるので、ここは素直に山水を愛でて楽しむ、と訳した。

（12）絶穀休粮：穀物を摂取しない修行法。「辟穀（へきこく）」、「断穀」ともいう。何も食物を摂らない断食とは異なり、大地からとれる五穀（一般に中国の五穀は、稲、黍、稷、麦、菽（豆））のような、人が主食とする代表的な五種類の穀物を絶つ修行。これは、地から取れる五穀は、地の濁気を受けて成ったものと考え、これを絶ち、清浄な天の気を体内に取り込むことで身体を純粋化することを目指すものである。アンリ・マスペロによれば、この修行法は、五穀と共に体内に入って来る五穀の精である三虫（三尸）を絶やすことを目的とし、道教の食餌法すべてに通じる基礎的なものであるとする。（（注３）前掲書『道教』、一八～二一頁参照。）なお、地を濁気、天を清気から成ったものとする考え方は、例えば、『三天内解經』（ＨＹ一一九六）巻上の二丁に、「老君散布玄元始氣。清濁不分、混沌狀如雞子中黄。因而分散、玄氣清淳、上昇爲天。始氣濃濁、凝下爲地。元氣輕微、通流爲水（老君玄元始氣を散布

す。清濁分たず、混沌の狀は雞子中の黄の如し。因りて分散し、玄氣は清淳なれば、上昇して天と爲る。始氣は濃濁なれば、凝下して地と爲る。元氣は輕微なれば、通流して水と爲る）」と見える。

（13）虚皇：「虚皇」という神格名は、上清経にも見えるので、古霊宝経独自の神格ではないが、『法輪妙経』Ａには、「虚皇」について、「太上眞一勸誡法輪妙經、九天有命、皆四萬劫一出。太上虚皇昔傳太上大道君（太上眞一勸誡法輪妙經、九天に命有り、皆な四萬劫に一たび出づ。太上虚皇は昔太上大道君に傳ふ）」（五丁）とあり、太上大道君に『太上眞一勸誡法輪妙經』を伝授した上位の神格として描かれている。「虚皇」について、古霊宝経の他の例としては、『太上洞玄靈寶本行因縁經』（ＨＹ一一〇七）に、「…（前略）爲太極左仙公、登玉京入金闕、禮无上虚皇（太極左仙公と爲り、玉京に登り金闕に入り、无上虚皇に禮す）」（一丁）、また、『洞玄靈寶玉京山步虚經』（ＨＹ一四二七）に、「玄都玉京山在三清之上、（中略）、無上大羅天、太上無極虚皇天尊之治也（玄都玉京山は三清の上に在り、（中略）、無上大羅天は、太上無極虚皇天尊の治なり）」（一丁）等とあり、古霊宝経では玉京山の宮殿にいて、大羅天をその治とする上位の神格として考えられているようである。

（14）五嶽：中国で五方位（東西南北中央）を象徴する五つの聖山。一般的には、東嶽＝泰山、西嶽＝華山、南嶽＝衡山、北嶽＝恒山、中央＝嵩山、とされる。古霊宝経では、この五嶽に天書である眞文や

天眞から伝授された経符等を封じ、それにより五方を鎮めるという記述が見える。例えば、『太上洞玄靈寶眞文要解上經』（ＨＹ三三〇）に、「天地所以長存不傾者、元始命五老上眞、以靈寶眞文封於五嶽之洞、以安神鎮靈、制命河源致洪泉不涌、大災不行（天地の長存して傾かざる所以は、元始五老上眞に命じ、靈寶眞文を以て五嶽の洞に封じ、以って神を安んじ靈を鎮め、制して河源に命じ洪泉の涌かざるを致せば、大災行なはれざるなり）」（一丁）とある。また、『太上洞玄靈寶智慧本願大戒上品經』（ＨＹ三四四）には、「若無其人、一通封付五嶽名山矣（若し其の人無くんば、一通もて五嶽名山に封じて付すなり）」（十八丁）とあって、経符を伝授する資格のある人がいなければ、それら一通を、五嶽名山に封じるという記述も見える。

（15）太無：『法輪妙經』Ａに、「流煥太無」（一丁）とあり、『法輪妙經』Ｂでも「逍遥太無」（二丁）とある。『法輪妙經』Ｂと同様の表現は、『太上靈寶諸天内音自然玉字』（ＨＹ九七）巻二に、「（前略）當有三色之雲迎子、上昇景帝之庭、逍遥太无之内、位爲景霄眞人也（當に三色の雲有り子を迎へ、景帝の庭に上昇し、太无の内を逍遥し、位は景霄眞人と爲るべし）」（八丁）と見え、このように表現される「太無」は、光の輝きが流れ、逍遥できる空間としてイメージされている語であると解釈できる。「太無」については、『アジアの文化と思想』三一号掲載の『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙經』訳注ノートの注（15）「流煥太無」を参照のこと。

テキスト1―4（二表五～二裏二）

凡學得道、如此。自然十方上眞・衆仙・已得正道、四方無極世界塵沙而來、眞人從無數劫、皆受**太上靈寶洞玄眞一勸誡法輪妙經**（注16）。輪轉因縁、皆籍先世之功、以得今日之道、莫不由其前行積善所致。此法玄奥、非愚情淺智所可明了。唯得道之人、體眞入妙、乃悟生死不滅、功過（注17）相藉如經之行、已得成至眞矣」。

テキスト1―4（二表五～二裏二）**訓読**

凡そ學びて道を得るは此くの如し。自然十方上眞・衆仙・已得正道、四方無極世界の塵沙にして來り、眞人は無數劫より、皆な**太上靈寶洞玄眞一勸誡法輪妙經**を受く。輪轉の因縁は、皆な先世の功に籍り、以て今日の道を得るは、其の前行積善の致す所に由らざるは莫し。此の法玄奥なれば、愚情淺智の明了すべき所に非ず。唯だ得道の人のみ、眞を體し妙に入り、乃ち生死して滅せず、功過相ひ藉るを悟る。經の行の如くせば、已に至眞と成るを得るなり」と。

テキスト1―4（二表五～二裏二）**現代語訳**

凡そ学んで道を得ることは、このようなものである。自然十方上眞・衆仙・已得正道は、四方無極世界

から塵や砂のような数となってやって来たが、眞人は無數の劫の時間の経過によって、皆な『**太上靈寶洞玄眞一勸誡法輪妙經**』を伝授されている。輪廻転生する因縁は、皆な前世の善功によるものであり、そうして今日（今世）の道を得たことで、前世で行い積んだ善功によらないものはない。この教えは奥深いものなので、愚かで智恵の浅い者がはっきりとわかることのできるようなものではない。唯だ道を得た人のみが、道の真理を体得して妙なる境地に入り、そうして死と生を繰り返して滅びることがなく、功と過（善行と悪行）とは互いに影響し合うことを悟るのである。経典に説く行のようにすれば、（それは）已に真に至った者（眞人）となることができるということなのである。」

テキスト1―4（二表五～二裏二）**語釈・注釈**

（16）**太上靈寶洞玄眞一勸誡法輪妙經**：現行の道蔵本では、経典は四巻に分かれ、それぞれ『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙經』、『太上玄一眞人説勸誡法輪妙經』、『太上玄一眞人説三途五苦勸戒經』、『太上玄一眞人説妙通轉神入定經』という経題がつけられているが、この部分から、三人の太上玄一眞人が仙公に伝授しようとしている経典は、『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙經』であり、現行本の四巻は本来、『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙經』という経題の一つの経典であったことがわかる。

（17）功過：「功」は善行、「過」は罪過、悪行の意。善行を積めば必ず善い報いがあり、善でない行いを積めば、必ず災いがある、という観念を示す早期のものとしては、『易経』の坤卦の一説に、「積

善之家、必有餘慶。不積善之家、必有餘殃（積善の家、必ず餘慶有り。不積善の家、必ず餘殃有り）」（本田濟著『易』、朝日新聞社、一九九七年、七〇頁参照）が挙げられるが、「功」、「過」の語を用いて道典中、このような考えを示した早い時期の例として、『抱朴子内篇』第六「微旨篇」に、抱朴子が『易内戒』、『赤松子經』、『河圖記命符』等を見て、「天地有司過之神、随人所犯輕重、以奪其算、算滅則人貧耗疾病、婁逢憂患、算盡則人死、諸應奪算者有數百事、不可具論（天地に司過の神有り、人の犯す所の輕重に随ひ、以て其の算を奪ふ、算滅すれば則ち人貧耗疾病となり、しばしば憂患に逢ひ、算盡くれば則ち人死す、諸もろの應に算を奪ふべき者に數百の事有り、具さには論ずべからず）」と述べる件りがあり、人の「過」即ち悪行が寿命を縮めるという考えが見える。ここではその後に、身中にいる三尸や竈の神が定期的に天上の寿命を司る神（司命）に人の罪を報告すると、その罪について「大者奪紀。紀者、三百日也。小者奪算。算者、三日也（大なれば紀を奪ふ。紀とは、三百日なり。小なれば算を奪ふ。算とは、三日なり）」として、罪の大小により、定められた日数の寿命が削られることも述べられている。（三尸が寿命を奪うような罪の報告に関わっていることは、辟穀の修行が、体内に五穀を通じて入ってくる三尸を絶やすことを目的の一つとするものであることを考えると、興味深い。これについては、（注12）を参照のこと。）また、更に「然覧諸道戒、無不云欲求長生者、必欲積善立功、慈心於物、恕己及人、仁逮昆蟲、…（中略）…、如此乃爲有德、受福於天、所作必成、求仙可冀也（然して諸もろの道戒を覧ずるに、長生を欲求するを云わざる者無く、必ず善を積み功を立てんと欲し、物

に慈心あり、己を恕すことを人に及ぼし、仁は昆蟲に逮び、…（中略）…、此の如くせば乃ち有徳となり、福を天に受け、作す所必ず成じ、求仙冀ふべきなり）」云々とあり、善行の報いとして、仙人になることもできるとする考えが見える。（前掲書『抱朴子内篇校釋』一二五～一二六頁参照。）この功過の観念は、やがてその大小・深浅が数量化され、道徳的反省の指標とするための功過格のような指導書も作られ、それは宋代以降に流行するようになっていく。しかし、『法輪妙經』では「功過」の語は用いられているが、まだそれを明確に数値化するような段階には達していない。（『道教辞典』平川出版社、一九九六年初版第二刷、一三七頁、及び『道教小辞典』、上海辞書出版社、二〇〇一年、二二九頁等参照。）